論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　曽田長人

２００２年１０月１日、曽田長人君の学位請求論文『１９世紀ドイツにおける古典語教育・古典研究の展開と国民形成―テオドール・モムゼンとフリードリヒ・ニーチェを手がかりに―』の最終試験がおこなわれた。主査は地域文化研究専攻助教授足立信彦、他の審査員は、地域文化研究専攻から教授塚本明子および黒住真、相関社会科学専攻から教授山脇直司、さらに、曽田君が地域文化研究専攻に在学中指導教官をつとめた帝京平成大学教授麻生建である。

曽田長人君の提出論文は、そのタイトルに示されているように、近代ドイツの国民形成のプロセスの中で果たした古典語教育および古典研究の役割とその紆余曲折をきわめて詳細に跡づけ、国民形成の歴史に新しい光を投げかけたものである。

論文は４章立てになっており、第１章では問題の出発点となる１８世紀後期から１９世紀初期にかけて、当時の人文主義者たちが抱いていた古典語教育および古典研究に基づく国民形成のコンセプトを再構成し、第２章では、このコンセプトに支えられた新人文主義的な古典語教育および古典研究の発展と、現実の国民形成の展開のプロセスの間の相関関係を追跡し、第３，４章では、顕著な差異が認められる二人の古典研究者、テオドール・モムゼンとフリードリヒ・ニーチェによってなされたその新しい位置づけの背景と主眼点が、ヨーロッパ統一という現代の問題も視野に入れながら検討されている。

展開のプロセス全体はそれ自体きわめて複雑であるが、曽田君はそれらに通底するものとして二つの図式を提起し、それを骨格として論文を構成している。第一は「有機体論と機械論の対立」の図式であり、この図式はヨーロッパとオリエント、ドイツとフランスといった大きな枠組みの間での対立の図式であると同時に、新人文主義とそのさまざまな対抗思潮との間に見られる対立の図式でもある。第二は、個人の形成とその媒体（手段）、および国民形成との間の三位一体的関係の図式である。特に、後者について、そこには宗教改革以来の「信仰の原理の行為の原理に対する優位」という枠組みが、そのつど姿を変えて登場すると主張している。つまり、そのいずれに重点を置くにせよ、個人の形成と国民形成は、つねに密接な相関関係の中に置かれており、またその媒体はそれぞれの局面では異なっているものの、前二者と切り離された形で登場することは決してない。その意味で三者は「三位一体」であり、かつ有機的な関係にあるが、同時に、何らかの意味で超越性をともなった精神的なもの（信仰の原理）が先行し、それに対する帰依をへた上ではじめて行為としての政治的、経済的な活動が肯定されると指摘されている。

この論文の最大の特徴は、従来、主として政治的な側面から考察されてきた近代ドイツの国民形成のプロセスを、古典語教育および古典研究という、一般的には疎遠とも見える観点を切り口にして、再構成しなおした点にある。もちろん、このことは、ドイツにおける国民形成のプロセスが長い間文化的な側面に重点を置いてきたことと密接に関係しており、その意味ではきわめて特異な現象であると言える。しかし、曽田君は、両者の関係をかなり大胆に図式化することによって、この図式を古典語教育や古典研究がすでに政治的な力を失った二〇世紀の大衆ナショナリズムにおける国民形成や、また、最近あらためて見直されているモムゼンとニーチェ

による新しい可能性の提言に対しても適用している。

論文の口述審査においては、この論文が博士論文として十分な水準に達しているとの評価が審査員全員からなされた。

ただ、上で触れた図式化に関して、図式化そのものに問題があるわけではないが、いくつかの点で不十分さが残るという指摘がほぼ全員から出たことも付言しなければならない。そのなかでも、特に問題となったのは、「信仰の原理の行為の原理に対する優位」の枠組みであり、この枠組みについて、一方でより一層の一般化（抽象化）の必要性が指摘されると同時に、それぞれの局面における具体的な現れ方に関してより精密な分析が必要である、との指摘がなされた。

しかし、この論文の核の一つをなしている古典語教育および古典研究に関する詳細な歴史的叙述は、日本において初めてなされたものであり、叙述自体の持つ価値以外に、たとえばドイツにおける精神科学の成立史研究に対する寄与など、さまざまな可能性を秘めているという指摘もあった。資料および文献に関しても、可能な限りの渉猟がなされており、また付されている膨大な注によって細部にわたる目配りがなされ、形式的にも十分整った博士論文であると言える。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。